

## 新・上級ハムになる本 発行にあたって

本書の前身である『上級ハムになる本』は、今から40年近くも前の昭和42年(1967年)3月に第1級および第2級アマチュア無線技士の国家試験を受験される方の参考書を目的にJA5AF 大塚政量氏の執筆により、初版が発行されました。

昭和42年というと、日本のアマチュア無線局の総数は未だ5万局を少し超えたところで、無線従事者の数も第1級アマチュアが2000余人、2級が6000余人、電信級(現在の3級に相当)が8300余人、電話級(現在の4級に相当)が86000余人という状況で、その前の年、昭和41年に日本アマチュア無線連盟の行う「養成課程講習会」がスタートしています。

『上級ハムになる本』は発行当初は第1編から第3編の三つに大きく分けられ、第1編では「上級ハムの基礎知識」と題して受験案内や上級ハムの操作範囲、免許申請の方法などを紹介し、第2編では「上級ハムの無線工学」として電気物理、電気回路、電子管および半導体、電子管回路、無線送信機、無線受信機、電源、通信方式、空中線および給電線、電波の伝わり方、測定器および測定法、無線数学の12章に分けて解説していました。

第3編では「上級ハムの電波法規」と題して、国際電気通信条約と無線通信規則、さらに電波法およびこれに基づく命令を紹介していました。

初版発行以来、多くの読者に第1級、第2級ハムの試験を受験するための参考書として愛用され続け、昭和48年1月までの6年間で19版もの重版を行いました。

この間、無線技術のめざましい発達、さらに数多くの読者の方々からの質問や要望を受ける形で昭和48年4月に大改訂が行われています。

この6年間のアマチュア無線の発展は目覚しく、昭和48年には日本のアマチュア無線局の総数は213000余局、無線従事者の数も第1級アマチュアが3500余人、2級が15000余人、電信級が28000余人、電話級が322000余人と急成長を遂げました。

この昭和48年の改訂で、ページ数も100ページ近く増えています。この改訂後10年、昭和58年1月には改訂第25版が発行されました。

翌昭和59年(1984年)1月には、さらに内容の見直しを行い、新版として最新

の無線技術や試験問題にマッチするように内容を一新して発行、総ページ数も450ページ余りとなり、これも上級ハムを目指す読者の良きアドバイザーとして平成2年(1990年)まで6年間、12版の発行を數えました。

この年5月には無線従事者制度の変更により、電話級アマチュア無線技士は第4級アマチュア無線技士に、電信級アマチュア無線技士は第3級アマチュア無線技士に資格が変わっています。

昭和63年(1988年)10月の国家試験からすべて記述式での解答であった第1級および第2級アマチュア無線技士の国家試験が現在の択一式に変更になり、試験に出題される問題も少しずつ変わってきたことから、平成3年(1991年)7月、国家試験の問題傾向に合わせて改訂を行い1996年までの5年間、計9版を発行しています。

そして平成9年(1997年)5月、新問題にも対応させるべく、無線工学専門の参考書として再出発をしました。

同年11月には第2版を発行しましたが、その後、事情により重版ができない状態になってしまいました。

\*

2005年10月、電波法令の改訂により、アマチュア無線技士国家試験の電気通信術の実技試験がやさしくなり、第3級アマチュア無線技士の国家試験では通信術の実技試験がなくなり、法規の試験の中でモールスの理解度を確認するための問題となりました。さらに第1級および第2級アマチュア無線技士の試験は、従来は1級が1分間60字、2級が45字のスピードによる受信テストであったものが、1級、2級とも「1分間25字の速度の欧文普通語による約2分間の音響受信」に改められました。

これにより、1級や2級の試験を受けたくても、今まで電気通信術の試験が難しくてあきらめていた方にとって、上級ハムになるチャンスが大きく広がりました。上級ハムを目指す読者の方から、上級ハムになるための参考書が欲しいという要望が多く弊社に寄せられておりました。

本書『新・上級ハムになる本』では、無線工学編についてはJA1AYO 丹羽一夫氏に、法規編についてはJA1MKS 野口幸雄氏に執筆をご担当いただきました。

《編集部》